

東南アジアの世界遺産を訪ねました（シェムリアップ編）

子供の頃、ゲゲゲの鬼太郎をテレビで見ていて、アンコール・ワットに出かけて亡靈と戦う話がありました。それでアンコールという名前は小さい時から知っていたのですが、半世紀を経て、ついに訪れることができました。

[アンコールの遺跡群（Angkor）](#) はカンボジア北西部のシェムリアップにあります。ホテルを予約した際、シェムリアップ空港まで送迎をお願いしておいたところ、待っていた送迎車がなんとトウクトゥクで、これにはずっこけました。

アンコールは、クメール人による王朝が栄えた場所で 9 世紀から 600 年ほど続き、12~13 世紀に最盛期を迎えます。その時代に代々の王たちがさまざまな建築物を造営して、アンコールは壮大で崇高な都に発展してきました。

1431 年にシャム人によって破壊されて熱帯林の中に埋もれてしましましたが、1860 年にフランス人のアンリ・ムオが発見しました。

アンコール・ワット、アンコール・トムを中心として、周辺の寺院や水利施設（貯水池・運河）、さらにはアンコール以前の都城の跡などを含めて、400 km²におよぶ広いエリアが世界遺産に登録されています。これは文化遺産としては中国の「万里の長城」、エジプトの「メンフィスのピラミッド地帯」に次ぐ 3 番目の広さになります。

[アンコール・ワット](#)（クメール語で「寺院によって作られた街」）は、12 世紀前半にスリヤヴァルマン 2 世が約 30 年をかけて築造したヒンドゥー教の大寺院です。敷地は周囲 5.4km、幅 190m の環濠に囲まれた長方形で、伽藍配置は左右対称をなしています。中央に高さ 65m の大尖塔がそびえ、四方にも 4 基の塔があります。これらは、ヒンドゥー教の宇宙観で世界の中心と考えられた須弥山（メル山）の 5 つの頂上を表しており、天界（宇宙）の神々と交信する場所でもありました。なお、中央尖塔のご神体は、王とヴィシヌ神（太陽神・維持神）がひとつになったヴィシヌ・ラージャ神像だといいます。

伽藍には 3 重の回廊があります。建物は砂岩やレンガを積み上げて造られているので、西洋の大聖堂のようには高くできない代わりに、回廊で複数の建物をつなぐことで荘厳な建築に見せています。



ヒンドゥー教の寺院は入口が東にあるのが基本です。東とは太陽が登る方角で、太陽神スリヤは生命・再生・秩序の象徴なので、東が始まりの方角とされるからです。例えば、プランバナン寺院などは東向きの正統派です。ところがアンコール・ワットは西向きです。

それは、スリヤヴァルマン 2 世が自身をヴィシヌ神として神格化し、死後の住まいとして寺院を建てたからだと考えられています。ヴィシヌ神は西方を守護する神です。東は誕生の象徴ですが、西は死の象徴です。基本的に礼拝は右回り（時計回り）、葬送儀礼は左回りであり、アンコール・ワットの回廊のレリーフが左回りで彫られていることがその説を裏付けています。



中央の尖塔へは急勾配の階段を登る



一部の柱に建立当時の彩色の跡がうかがえる

3重の回廊のうち一番外側の回廊の壁には、インド神話などを主題にした精巧なレリーフ（浮き彫り）が施されています。表参道から入って回廊を左回りに進むと、古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」、スーリヤヴァルマン 2 世軍隊の行進、天国と地獄の模様、乳海攪拌の神話、ヴィシュヌ神とアスラ（阿修羅・悪神）の戦い、クリシュナ神（ヴィシュヌ神の化身）とアスラの戦い、アムリタ（不老不死の靈薬）をめぐるデーヴァ（神々）とアスラの戦い、古代インドの叙事詩「ラーマーヤナ」が、さながら 3D の絵巻物のように続きます。



「マハーバーラタ」は王位をめぐって戦う物語
正義とは何かを問いかける宗教的・哲学的な寓話だという



「天国と地獄」のリレーフ
上段が極楽、中段が裁定される場所、下段が地獄を描いている



東の壁面に 50m にわたって描かれた「乳海攪拌」のレリーフ
真ん中で指揮をとっているのがヴィシュヌ神

乳海攪拌はヒンドゥー神話に出てくる有名な天地創造の神話です。大曼ダラ山を攪拌棒、大蛇ヴァースキを綱に見立てて、デーヴァとアスラが両側から引き合います。それが 1,000 年も続いた後、海が乳海となり、神聖な存在や宝物（美的女神ラクシミー、天女アプサラ、聖なる牛カーマデーヌ、白象アイラーヴァタ、毒ハーラーハラなど）が、続々と生まれました。

最後にアムリタが生まれると、アスラがそれをいちはやく獲得して飲み込みますが、ヴィシュヌ神がアスラの首をはねてアムリタを取り出しデーヴァ側に渡したため、神が不死の存在になったと伝えます。

クメール美術の比類のない素晴らしいは、柱や壁に彫られた端麗なデヴァター（女神）やアプサラ（天女）像にも見ることができます。3,000 体以上もある緻密なレリーフはそれぞれの服装や表情に個性があり、その魅力に心を奪われます。



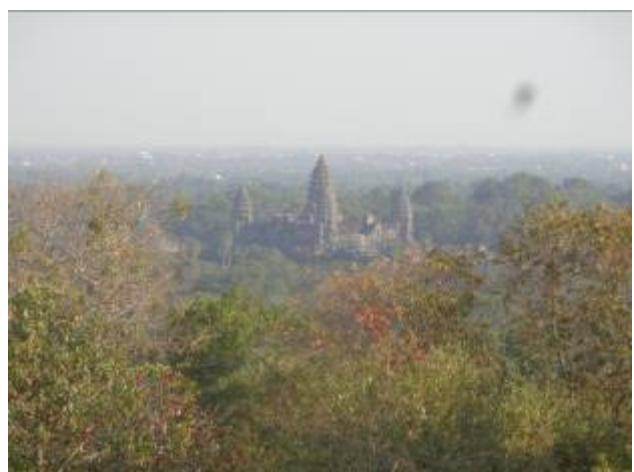
寺院を守るために静かに立っているのが「デヴァター」、神々を喜ばすために踊っているのが「アプサラ」

13世紀になると、クメール王国にも次第に仏教が浸透しました。アンコール・ワットもヒンドゥー教→大乗仏教→上座部仏教と宗教の変遷をたどり、現在は僧侶による読経や礼拝が日常的に行われています。

アンコール・ワットからアンコール・トムへ向かう途中に、**プノン・バケン**と**バクセイ・チャムクロン**の寺院があります。プノン・バケンはヤショーヴァルマン1世が築いたアンコール・ワットより古い王朝最初期の寺院で、高さ65mの丘の頂上にあり、それ自身が須弥山を表現しています。



プノン・バケンは5層のピラミッド型でボロブドゥールに似ている



プノン・バケンからはアンコール・ワットの全景がよく見える



マラソンコースを示す看板や、ランニングしている集団を何度も見かけました
猫ひろしさんの影響もあるのかな？

アンコール・トム（クメール語で「偉大な街」）は、クメール帝国後期にジャヤヴァルマン7世によって築かれました。城壁と幅113mの環濠で囲まれた1辺3kmの正方形の都市遺跡で、アンコール・ワットの5～6倍の面積があります。



アンコール・トムには5つの門があり、觀世音菩薩の四面仏が四方を見据えている

アンコール・トムの中心にあるのが仏教寺院のバイヨンで、2重の回廊に囲まれた高さ45mの中央の大祠堂は須弥山を象徴しています。これを取り巻くように16基の尖塔と、それぞれ異なった表情をした54体の觀世音菩薩の四面仏があります。建物の内部構造はとても複雑で、巡礼路がはっきりしないだけでなく、開かない扉や壁の奥に隠れた彫刻などから、無秩序な増改築が繰り返された様子が読み取れます。

回廊の壁面に多数のレリーフが彫られていますが、アンコール・ワットは宗教色が強いのに対して、こちらは貴族や庶民の生活の様子が刻まれているなど、趣に違いがあります。

大乗佛教の宇宙観では、バイヨンから東西南北に延びる広い参道は世界各地に向かう道を、アンコール・トムの城壁はヒマラヤの靈峰を、環濠は無限の大洋を意味しているといいます。



庶民の暮らししづりが描かれたレリーフ

バイヨン寺院は東が正面
四面仏塔はバイヨン様式と呼ばれるクメール独特の美術様式

バイヨンから北大門へ向かうと東西 600m、南北 300m の周壁に囲まれた王宮跡があります。東向きの前面には象のテラスと呼ばれる高さ 6m、長さ 300m の大露台があり、北端は三島由紀夫の戯曲でも知られるライ王のテラスに続きます。王たちが軍の観兵を行った場所だといいます。塔門（正門）をくぐって中に入ると、3 層ピラミッド型のピミアナカス（天上の宮殿）があります。その奥にあった王宮自体は木造であったため残っていません。

周壁を出て南隣に、かつてはバイヨンより高い塔を有していたというバプーオンがあります。2 重の回廊に囲まれた祠堂はやはり須弥山を表現しています。

王宮の周囲には、クリアン、プラサット・スウル・プラット、プリア・ピトウ、テップ・プラナム、プリア・パリライといった小規模な寺院があり、これらは歩いて見学することができます。



象のテラスには、さまざまな神象や、聖獸ガジヤシンハ、蛇神ナーガなどが彫られている



象のテラスから眺めるプラサット・スウル・プラット



上座部仏教のプリア・パリライ



ピミアナカスの基壇はラテライトのため赤く映える



(左) バプーオンの表には長さ 200m の空中参道がある

(右) 裏から祠堂を見上げると寝釈迦仏のような形をしている



アンコール・トムはその中だけでも広いし、周辺の遺跡となるとさらに距離があるので、流しのトウクトウクを捕まえて上手に利用するのがおすすめです。例えば、プリア・カーンはアンコール・トムから外へ 2km くらいありますが、トウクトウクに 2 ドルで送ってもらいました。（カンボジアの通貨はリエルですが、米ドルがかなり普通に使えます。）



プリア・カーンはジャヤヴァンルマン 7 世がチャンバ王国に勝利したことを祝して建立した父の菩提寺
(左) 珍しい 2 階構造の建物 (右) 蛇神ナーガを踏みつける怪鳥ガルーダの像



アンコール・トムの環濠

話は変わりますが、空港に迎えに来てくれたトゥクトゥクに、シェムリアップに滞在中、ずっと運転手をしてもらっていました。アンコール遺跡群はホテルのある市の中心部から 10km くらい離れているので、何らかの交通手段が必要なのです。

ホテルからアンコール遺跡まで送ってもらった時に、帰りに迎えに来もらう場所と時間を約束しておくと、クーラーボックスに冷えたペットボトルも何本も用意して待っていてくれました。とにかく暑いので、この心遣いはとってもありがたかったです。そして少し離れた場所にある郊外の寺院などに立ち寄りながら、ホテルまで送り届けてもらっていたという具合です。



アンコール・トムの東大門（勝利の門）の上で

おそらく観光客に一番人気なのはタ・プロームだと思います。ジャヤヴァルマン 7 世が母の菩提寺として造った仏教寺院（のちにヒンドゥー教）ですが、発見当時のまま保存しようという方針により、いたるところでガジュマルの木の根が建物を蝕んだ姿になっています。自然の脅威をうかがい知ることができます。



その他にも、アンコール・ワットの予行で建築されたとされるタ・ケウ、頻繁な増改築の痕が残るバンテアイ・クデイ、王の沐浴の池スラ・スラン、巨大な貯水池の東バライと西バライ、治水に対する信仰や技術の象徴ニヤック・ポアン、植物の蔓が女神像を締め付けるタ・ソム、「東洋のモナリザ」と呼ばれる優美なデヴァター像で知られたバンテアイ・スレイ、最古のヒンドゥー教寺院であるプリア・コーなどなど、ここでは紹介しきれないほどたくさんの貴重な遺跡が点在しています。

かなり広い範囲に及びますし、暑さのため体力的に続けて長時間の見学は厳しいです。私は 2 泊 3 日でしたが、あと 2 日くらいは欲しかったな、と思いました。



タ・ケウとは「クリスタルの古老」の意
王の死により完成しないまま放置された



バンテアイ・クデイ
ヒンドゥー教寺院から仏教寺院に改造された



アンコール国立博物館
おびただしい数の出土品が展示されている

2025 年の世界遺産委員会で、**カンボジアの記憶の場：抑圧の中心から平和と反省の場へ (Cambodian Memorial Sites: From centers of repression to places of peace and reflection)** が世界遺産に登録されました。構成遺産は、プノンペンのトゥール・スレン虐殺博物館、チューン・エク虐殺センター、コンポンチュナン州の**旧 M-13 刑務所**で、これらは国際的にキリング・フィールド (killing field) として知られていますが、実はシェムリアップにもキリング・フィールドと呼ばれている場所があります。



シェムリアップのキリング・フィールドはワット・トゥメイ寺院の境内となっていて、犠牲者たちの人骨や遺品を安置する慰靈塔が建っている

1975年4月17日、ポル・ポト率いるカンボジア共産党がプノンペンを占領し、軍事政権（クメール・ルージュ）を樹立しました。1978年にベトナム軍の侵攻によってポル・ポト政権が崩壊するまでの3年8か月の間に、100万ないし300万人のカンボジア人が虐殺されたといいます。ポル・ポトは1998年に亡くなるまでゲリラ活動を続け、カンボジア国土のあちこちに大量の地雷が残りました。除去が進んでいるとはいものの、犠牲になった人は数知れません。

カンボジアの地雷除去活動家であるアキ・ラー氏が私設、運営する地雷博物館も、ぜひ訪れてほしい場所です。クメール・ルージュに関する詳しい解説があります。隣接して地雷被害孤児のための養護施設もありました。まだ過去の話ではないのです。



アキ・ラー氏が回収した大量の地雷



元プロサッカー選手の中田英寿さんも慈善活動に参加しているそうです



NPO 法人世界遺産アカデミー 正会員
世界遺産検定マイスター 広江 淳良